

-----  
当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.  
-----

「アジア・アフリカ地理言語学研究」2021 年度第 2 回研究会

日時：2022 年 3 月 19 日（土）9:00–17:45, 2022 年 3 月 20 日（日）9:00–14:45

場所：オンライン

使用言語：英語

2022 年 3 月 19 日・20 日に東京外国語大学 AA 研「アジア・アフリカ地理言語学研究」プロジェクトとヤポネシアゲノム A03 班・B02 班の共催でアジア・アフリカ全語族における「小麦・粟・黍・稗・里芋・山芋」の語彙の地理分布と形成過程に関する研究会をオンラインで行いました。遺伝学・考古学のセッションも設け、宮本一夫司会、庄田慎矢 “East-West Interaction of Cereals in Eurasia: The ‘Globalisation of Food’ in Prehistory”, 本橋令子 “The taro eaten by ancient Japoneseans” および鈴木仁司会、里村和浩 “Phylogenetic relationships and genetic structures in the three Japanese millets: *Setaria italica*, *Panicum miliaceum* and *Echinochloa esculenta*”, 熊谷真彦 “Genomics studies on Asian and African rice”, 清水健太郎 “Wheat: polyploidy and genome sequencing”という最先端の発表もありました。

今回と前回の人類集団とともに移動する動物に関する研究集会は特にヤポネシアゲノムの課題の一つとして企画したもので、特に今回は予想外の方法でヤポネシア人の形成過程がシャープに浮き彫りにされました。というのは、日本・朝鮮・華北などではごく当たり前に思われる以上の穀物は他の地域では稀にしか見られないか、小麦のように近年になって移入されたものであることが言語にもくっきりと現れていたのです。その最たるものはいわゆるブッシュマンの諸言語、いくつもの語族からなるため languages in the Kalahari basin area と呼ばれているもので、純粹の狩猟採集民としてそうした語彙は一切見当たらず、今回は発表すらありませんでした。そうした状況は寒帯や熱帯地域でも多く見られるのに対して、華北では 6 つの語彙が全て見られ、しかも日本語のイネとコメのように植物としてと穀物としての言い方を区別するのです。すでに稲に関してはアジア全域に関してそういう傾向は確認しており、「乳」に関しても牧畜が盛んなチベット地域では母乳と動物の乳を区別するなど細かな言い分けを行うのに対して、非牧畜地域ではそのような区別はありません (*Studies in Asian Geolinguistics* II, III, <https://publication.aa-ken.jp/>)。

今回は稲に加えて 6 つの主食となる栽培植物を取り上げたため、それらがセットとして出現する地域が一層クリアーに炙り出されてきました。ヤポネシアを中心としてみると、雑穀に言って、里芋など根菜類は南から来て、雑穀類は遼寧省など北から、小麦は温帯乾燥

地域である西方から、稲は温帯湿潤地域の東南方から、おおよそ以上のような順序で重合して複合体が作り上げられたようです。日本語の語彙でも「ムギ」「ヒエ」は中国語の「麦」「稗」の古い借用語形であるようですが、それ以外は他の語族とは繋がらない語形のように、より古くから食していたことを反映するようです。「イモ」のように後でサツマイモやジャガイモがキリシタン時代にもたらされて盛んに栽培されるようになった後、元々指していた事物が逆に「サト」とか「ヤマ」を付けて背後に退いたと思われる例もあります。

里芋については本橋玲子先生が遺伝学の立場から縄文時代に存在したとされましたが、考古学の側からすると土器に残存するバイオマーカー解析のような最先端の方法によっても確認できていないのだが、という意見が出ました。遺伝学からすると礼文島の船泊遺跡、渥美半島の伊川津遺跡、千葉県市川市などの縄文時代の古人骨がゲノム解析からして南方起源であることがあいついで明らかになっていて、里芋も縄文時代にもたらされていたとすると整合的となり、今後の更に深い解析が待たれます。また文系の者からすると、里芋がいったんほぼ絶滅しかけたときに弘法大師が温泉近くで栽培して保護したという伝説がある地のサンプルを本橋先生が収集して、遺伝学的にも独自の古い類にほぼまとまることを示されたのはとても胸熱のエピソードでした。

小麦の遺伝学的解析が専門の清水健太郎先生からは言語学に関して鋭い質問がいくつも出され、特に比較言語学的な概念である“cognate”（同源語）を借用に関して使うのは如何なものか、といった点はこのアジア・アフリカ地理言語学のプロジェクトでは語族を超えた関係にも強い関心を寄せ、言語接触や借用についてよく扱うのに対し、地点数が膨大な数にのぼるため並行例を厳密に扱う比較言語学の面については片手間になっていることは、今後の努力点となりました。一語族内に部分的にしか存在しない語形に関しても祖語に遡るか否かは印欧語のようにヨーロッパにも跨る語族の場合、ヨーロッパが対象範囲に含まれていないという問題点についても指摘を受けました。しかし、ヨーロッパは地理言語学的にも比較言語学的にも非常に精細に研究されていて汗牛充棟の研究蓄積があり、ドッキングさせるにはまだ長い時日が必要とされます。清水先生ご所属のチューリッヒ大学では、マックスプランク研究所と同様に比較言語学者が代表となって遺伝学・考古学とのコラボによる長期プロジェクトが進行中で、そのバックグラウンドの強みを感じさせられました。

B02 班では 2022 年度前半には 2021 年度の動植物の語彙研究を *Linguistic Atlas of Asia and Africa*, Vols. 1, 2 として公刊し、AA 地域での言語面の地理分布と形成過程を概括します。それを受けて、2022 年度後半には A03 班と協力しつつ遺伝学・考古学の論考とともに AA 地域のそれぞれの動植物に反映した人類集団の形成・移動過程をヤポネシア地域に焦点をあてた論文集の編集を行うことを計画中です。

(遠藤光暁)

以下は各人による要約：

1. Kohei NAKAZAWA (The University of Tokyo), Akiko YOKOYAMA (JSPS/ILCAA, TUFUS)

“Crop terms in Japonic”

日琉諸語（日本語と琉球語）におけるコムギ、サトイモ、ヤマイモ、キビ、アワ、ヒエの地理的分布を分析した。コムギは、日本語では KOMUGI、琉球語では INAMUGI が多く、南琉球を中心に単に MUGI とも言うところもある他、料理名や用途に基づく命名も見られる。日本古語では *komugi* または *mamugi* と言った。サトイモは、日本語では SATOIMO が多いが、HATAIMO や単に IMO の他種々の形式がある。琉球は SATOIMO、TAIMO、MUZI などがあるが、SATOIMO は日本語からの借用語と思われる。日本古語では *ipe tu imo* と言った。ヤマイモは、YAMAIMO の他、CUKUNEIMO、ZINENZYU、TOROROIMO など多様な名称が見られる。琉球では八重山では単に IMO と言う。キビは、日琉諸語全体で KIBI あるいは KIMI が広く分布し、その他の名称も基本的に KIBI あるいは KIMI を含む。KIMI が KIBI の周辺に分布することから、KIMI の方が古いと考えられる。アワは日琉諸語で広く AWA でその他の形式がほぼなく、あるいは借用語のようにも見えるが、諸方言の形式が *oo*、*aa*、*woa* など規則的な音韻変化を生じていることから古い言葉だとわかる。ヒエは日本語、琉球語ともに HIE が多いが、琉球は稗に当たる言葉がない地域も多く、HIE も規則的な音対応を示さず日本語からの借用語と見られる。琉球語に見られる KARASUMUGI などの形式からも、それほど食しなかったものと考えられる。

2. Rei FUKUI (The University of Tokyo)

“Crop terms in Korean”

今回の共通テーマの穀物語彙に関する韓国語の語形は次のようになる。

現代語（ソウル方言）：

小麦 *mir*, 里芋 *ʰoran*, 山芋 *ma*, キビ *kicaŋ*, アワ *co*, ヒエ *pʰi*

中世語（15 世紀）：

小麦 *mirh*, 里芋 *ʰoran*, 山芋 *mah*, キビ *kicaŋ*, アワ *coh*, ヒエ *pʰi*

中世語では、語末に *h* が現れるものが多い点を除けば、語形は現代語とほぼ同じである。また、これらのうち、里芋、アワ、ヒエは漢語からの借用語、あるいは漢字形態素に基づく語である可能性がある（なお、小麦もその可能性があることについて参加者からご指摘を受けた）。地理的分布に関しては、アワは、半島北部は *co* 系統、南部は *sosuk* などの語形が分布し、南北対立を見せる。それ例外の語については地域差は少ない。

3. Fumiki SUZUKI (Nanzan University), Kenji YAGI (Kokushikan University)

“Crop terms in Sinitic”

中国語方言におけるコムギ、サトイモ、ヤマイモ、キビ、アワ、ヒエの地理的分布を分析した。コムギは、「麦」「麦子」が全体に分布し、オオムギとの差異化が必要な北部～中部には「小麦」が分布する。サトイモは、「芋」を含む語形が全体に分布するが、北方の方言調査報告では立項されない場合が多い。ヤマイモは、北方に「山藥」、南方に「薯」系語形が分布し、南北対立を示す。「山藥」も「薯」系語形のヴァリエーションと見なしうることから、ヤマイモは「薯」、サトイモは「芋」という使い分けが認められる。キビは、南方の方言調査報告では立項されない場合が多いが、北方では植物と脱穀した実の呼称が区別される。植物としてのキビは、華北東部にモチ種を表す「黍」系、華北西部にウルチ種を表す「糜」系語形が分布し、「東西対立」を示す。キビの脱穀した実を表す語形は、「黄米」が華北に広く分布するが、その指示対象は地域によってモチ種とウルチ種の 2 つの可能性がある。アワもキビと同様に植物と脱穀した実の呼称が区別される。植物としてのアワは、北方に「谷（穀）」系語形、南方に「粟」系語形が分布し、南北対立を示す。アワの脱穀した実を表す語形は、北方に「米」系語形、南方に「粟」系語形が分布し、やはり南北対立を示す。ヒエは、「稗」を含む語形が全体に分布する。

#### 4. Chikako ONO (ILCAA Joint Researcher, Hokkai-Gakuen University)

##### “Crop terms in Chukotka-Kamchatkan”

チュクチ・カムチャツカ諸語（チュクチ語・ケレク語・アリュートル語・コリャーク語・イテリメン語）が話される地域の伝統的生業は狩猟採集漁撈であり、農業はロシア人が到達するまで行われていなかったため、農業及び穀物に関する語彙の多くがロシア語由来かロシア語を翻訳した造語である。例えば米は ris, ジャガイモ (yam, taro などはない) が K: kartotka, Itl: kartofelʲ といったロシア語の借用である。麦 (wheat) については K: pʃenitsa がロシア語からの借用, K: krupəlqəl (krup > krupa (Rus.) 「穀物」-lqəl 「～になる (もの)」), K: piŋəlqəl (piŋ 「灰」-lqəl 「粉になる (もの)」) という造語が見られた。そのほか、自生するイモ類に *Claytonia tuberosa* Pall. ex Schult. があり、それぞれ Ch: kəmtʃek, A: kəmsik, K. kəmtʃek, Itl: lqləm という。

#### 5. Mika FUKAZAWA (ILCAA Joint Researcher, National Ainu Museum)

##### “Crop terms in Ainu”

アイヌ語では、「小麦」そのものを指す語彙というよりは、「大麦」を指すものとして日本語の「麦」を借用した一様分布が見られる。「里芋」と「山芋」を直接指す語彙は見つからない。「キビ」に関しては地点に関する情報が少ないものの、三種類の語形が得られている。「アワ」と「ヒエ」は、農作物として考えることができるもので、それぞれに特有の語彙がある一方、両方を合わせて「農耕穀類」のような言い方をする場合もある。

#### 6. Yoshio SAITO (Takushoku University)

##### “Crop terms in Mongolic and Turkic”

タロは地中海沿岸地域の一部、ヤムは中国東部で栽培されているが、他のモンゴル語・テュルク語地域では知られていない。

コムギはモンゴル語・テュルク語ともに周辺部に少数の異なる語が見られるが、ほとんどの地域で *bugdai* 系の語が使用されている。この語は古代テュルク語にも存在するので、テュルク語の西方拡大とともに東から広がったと考えられる。

雑穀は「種子」に相当する語が使用されている地域もあり、地域によっては指しているものが異なる可能性もあるが、キビは周辺部のいくつかを除いてモンゴル語では *amū* 系、テュルク語では *tarık* 系の語が使用されている。アワについてはモンゴル語では *narim* が広く分布し、モンゴル語地域の西半分と中央アジアのテュルク語では共通の *xonog/konok* 系の語が分布している。ヒエは知られていない。

#### 7. Ryo MATSUMOTO (ILCAA Joint Researcher, Kansai University of International Studies) “Crop terms in Tungusic and Uralic”

ツングース諸語およびウラル語族については、多くがシベリアから北部に居住するため、里芋、山芋に相当する語彙は見当たらず、あわ・きび・ひえの語彙についても区別する言語は少ない。一方、小麦は、ツングース諸語においては中国内のツングース系民族にだけ借用語として存在している。またウラルには小麦・きびを表す語彙がそれぞれ5タイプずつあることを示した。

#### 8. Hiroyuki SUZUKI (ILCAA Joint Researcher, Aoyama Gakuin University), Shiho EBIHARA (ILCAA Fellow), Kazue IWASA (ILCAA Joint Researcher, Nagoya University of Foreign Studies), Keita KURABE (ILCAA), and Satoko SHIRAI (ILCAA Joint Researcher, The University of Tokyo)

##### “Crop terms in Tibeto-Burman”

本発表では、チベット・ビルマ諸言語から700余りの地点のデータをまとめ、「小麦」「里芋」「山芋」「黍」「粟」「稗」について言語地図を作成した。このうち、「小麦」だけが700を超えるデータが集まり、それ以外は主に言語域の南半分にあたる地域から100地点前後のみのデータで地図化した。「小麦」については、固有形式として [A] チベット＝ビルマ祖語 \**m-grwa* に遡るもの、[B] A 以外で初頭に coronal の子音を持つもの、[C] 両唇鼻音を持つものが見られる。これら3つの語形の発展を示し、また意味変化や借用関係についても地理的条件と関連させつつ議論した。「里芋」「山芋」については、複数の語形式にまとめることができたが、資料が不足し、語形の発展を跡づけるのは困難であった。「黍」「粟」「稗」については、語形について相互に関連するものもあり、意味変化であるか語形の指示する対象があいまいであるのか疑問が残ることを報告した。

9. Atsuko UTSUMI (Meisei University)

“Crop terms in Austronesian”

Terms for Taro and Yam are found all over the Austronesian world. Various species of yams are cultivated including ube (*Dioscorea alata*) and lesser yam (*Dioscorea esculenta*), which are most frequently cultivated and eaten. Word forms that are akin to /ube/ or /ubi/ are most frequently used forms within the Austronesian languages. The taro (*Colocasia esculenta*) has been cultivated from ancient times which is supposed to predate Austronesian immigration, and is definitely among the most important plants for everyday consumption. Austronesian terms for other crops, ‘wheat’, ‘*panicum miliaceum*’, ‘*setaria italica*’, ‘*echinocloa frumentacea*’ are difficult to find.

Out of the four, only ‘wheat’ has loan forms in some Austronesian languages, some of which seem to have been used for a relatively long time.

10. Shinya SHODA (Nara National Research Institute for Cultural Properties)

“East-West Interaction of Cereals in Eurasia: The ‘Globalisation of Food’ in Prehistory”

11. Reiko MOTOHASHI (Shizuoka University)

“The taro eaten by ancient Japonians”

12. Kazuhiro SATOMURA (Nagahama Institute of Bio-Science and Technology)

“Phylogenetic relationships and genetic structures in the three Japanese millets: *Setaria italica*, *Panicum miliaceum* and *Echinochloa esculenta*”

13. Masahiko KUMAGAI (National Agriculture and Food Research Organization)

“Genomics studies on Asian and African rice”

14. Kentaro SHIMIZU (University of Zurich)

“Wheat: polyploidy and genome sequencing”

以上については冒頭で言及した。

(遠藤光暁)

15. Makoto MINEGISHI (ILCAA), Masaaki SHIMIZU (ILCAA Joint Researcher, Osaka University)

“Crop terms in Austroasiatic”

現在、小麦はインドおよび東南アジアで広く消費されているが、データベースに見いだされる語形はごく少数である。インド亜大陸、マレー半島とその間のカーニコバル島では、小麦はヒンディー語を介してのペルシャ語からの借用語のさまざまな変異形が散見されるため、一方、大陸部ではクメール語やベトナム語に「稲」に修飾語のついた複合語があるが、ほかの語形は見られない。

タロイモは一般に、「芋」を指す総称語に修飾語がついた形で表される。データベースに現れる語形はインドシナ半島からマレー半島、インド東北部にかけて、10 種類の語形が分

布しているが、広い地域にわたって分布する支配的な語形は存在しない。

16. Mitsuaki ENDO (ILCAA Joint Researcher, Aoyama Gakuin University), Aika TOMITA (Osaka Shoin Women's University), Ayaka HIRANO (Osaka University)

“Crop terms in Kra-Dai”

・ *Setaria italica*, *Panicum miliaceum* and *Echinochloa esculenta*

アワの語形は、A) 海南島を含む広範囲に分布し、PT \*f- (Li 1977) に遡るタイプ、B) 貴陽周辺の北部の北部タイ諸語に分布し、PT \*ɣ- に遡ると考えられるタイプ、C) ~F) Kra 系諸語に分布するタイプ、G) ~H) 海南島に孤立的に分布するタイプ、I) 西双版纳のタイ・ナ語、タイ・ルー語に分布するタイプに分けられる。A) および I) はしばしば第1要素に「米」を表す形式を持つ。キビはアワの A) タイプと同源の語形のみ見つかる。ヒエの A)、B) タイプは、アワの A)、B) と一見よく似た語形であるが、初頭子音や声調の対応など音韻的特徴が異なっており、またアワの A) と比べて語形の変種が少ない。ヒエにはこのほか、Kra 系諸語と海南島に分布する C) ~F) タイプがある。アワ、ヒエとも、少数の特徴的な語形は Kra 系諸語と海南島に分布している。(富田愛佳)

・ taro

サトイモについては Kra-Dai の多くの言語で観察される。最も広範囲に観察されるのはタイ祖語の \*phlɛkD/\*phrɛkD (Li 1977) に遡ることができる形式である。ただし、この形式は海南島では観察されない。タイ祖語にみられる子音結合は一部の地域でのみ保持されており、北方タイ語群では p- に、中央タイ語群及び南西タイ語群では ph- に変化している。海南島で観察される形式のいくつかは地理的に離れた位置に分布する Kra 語派にも観察される。今回収集した形式は単音節のものが多かったが、一部では別の要素が先行して2音節の形式が観察される。「果物」に由来するとみられるものが先行する形式は海南島を中心に分布し、「根」に由来するとみられるものが先行する形式は大陸部に観察される。(平野綾香)

・ wheat

小麦についてはほとんど現地で生産していないため、ほとんど借用語が使用されている。そもそも東南アジアでは方言資料を見出すのが困難であり、タイ語・ラオス語ではサンスクリット由来の *khau saalii* が使用される。中国領内では中国語からの借用語が多数の地点で使われており、A) 麦類、B) 麵(小麦粉)類、C) 麦麵ないし麵麦類がタイ語派で使われている。A) の麦類が一番広く分布し、B) が広西東部に分布し、C) は両者の中間に見られるため、もともと A) が分布していたところ、B) の語形が入ってきて、その混合語形が中間地帯で生じたものと見られる。ただし、麵麦という語形は鈴木史己氏の地図により中国語方言にも存在することが分かり、最東部の中国語地域と接する位置に分布するため、中国語方言から直接借用したかもしれない。語順からしても大麦ではない小麦粉のとれる麦、という修飾語が順行構造となっていることも中国語由来であることを示す。他の語形も Kra 語派に見られる。(遠藤光暁)

17. Yoshihisa TAGUCHI (Chiba University)

“Crop terms in Hmong-Mien”

要旨未着

18. Noboru YOSHIOKA (ILCAA Joint Researcher, National Museum of Ethnology)

“Crop terms in South Asia”

インド・ヨーロッパ語族（インド・アーリヤ語派、ヌーリスタン語派）、アンダマン語族、ならびに4つの系統的孤立語に関して、コムギ、タロ、ヤム、キビ、アワ、ヒエなどの語彙を、それぞれ（推定される）語源に基づいてタイプ分類して、地理的分布を見た。各語彙それぞれのパタンを見た結果として、全体の分布的特徴を言えば、①アンダマン諸島ではこれらのうちタロ・ヤム以外の語彙がないこと、②南アジア全般的に、タロやヒエが気候的に育成しづらいのか、あまり栽培・食用されていないことなどが分かった。更に、③上記以外の millet 類が多く食用されていて、それぞれの指示対象が入れ替わったりなどの混乱が全体的に多く見られる、④これまでの研究会で見て来た語彙と比較して、ドラヴィダ語族から（インド・アーリヤ語派への）借用が圧倒的に少ないといった特徴も指摘した。

19. Nozomi KODAMA (ILCAA Joint Researcher, Kumamoto University)

“Crop terms in Dravidian”

「小麦」「里芋」「山芋」「キビ」「アワ」「ヒエ」が共通の課題であったが、インダス文明成熟期と時代の重なるインド南部新石器文化（デカン高原中部）の担い手にドラヴィダ祖語を結び付ける Southworth らの学説を考慮し、インダス文明地域で栽培が確認されている「大麦」と、インド南部新石器文化の早期から栽培が確認されている「トウジンビエ」、晩期までに「粟」と並んで導入されたとみられる「シコクビエ」を加えて、ドラヴィダ語族の継承語彙（『ドラヴィダ語語源事典』での etymon が認められているもの）と借用語彙に分けてその分布を比較した。小麦と大麦に関してはインド・アーリヤ語からの借用語彙のみが認められるのに対し、「トウジンビエ」は「稲」「里芋」と同様、少なくとも半島部の諸言語が共通に継承したとみられる語形があり、少なくともインダス文明期にはデカン地域にドラヴィダ語族が分布していたとする説に矛盾しない結果となった。しかし、亜大陸北西のブラフーイー語に（『ドラヴィダ語語源事典』には未収録の）「大麦」語彙があり、少なくともインド・イラン系の借用とは見なしがたいことから、この時期にインダス文明地域に（すでに系統分化した）ドラヴィダ語が分布して可能性をも示唆する結果となった。

20. Takamasa IWASAKI (ILCAA Joint Researcher, JSPS/ Kyoto University)

“Crop terms in Iranian”



本発表では、主に西洋語からの借用語が用いられ、伝統的にも重要な農作物ではなかったと考えられるヤム芋、里芋を表す語は対象から除外した。

小麦、黍、粟に関しては多くの言語で何らかのイラン祖語の形式を受け継いでいることが判明した。とりわけ小麦に関しては、ほぼ全ての言語においてイラン祖語で小麦を指す語を継承している。黍・粟に関しては、正確な種類の特定が困難ではあるが、概ねイラン祖語の形式を使用しているようである。一部の言語では黍 (*Panicum miliaceum*) と粟 (*Panicum italicum*) を区別しているようである。

イラン祖語に遡らない、或いは語源不明の形式は、イラン語派の言語が話される領域の周縁部に当たる地域に散見された。

## 21. Youichi NAGATO (ILCAA Joint Researcher, TUFs)

### “Crop terms in Semitic”

セム諸語の「小麦」は、(1) *hinṭa*、(2) *qamḥ*、(3) *birr*、(4) *fenraj* の4つのタイプがある。(1) *qamḥ* タイプはアラビア語の形で広く分布する。(2) アラム語やヘブライ語などメソポタミアでは *hinṭa* タイプが優勢でアラビア語もこの地域では *hinṭa* が使われる。古代のウガリト語や聖書ヘブライ語もこのタイプである。(3) *birr* タイプはアラビア半島南部の南アラビア諸語とその周辺のアラビア語にみられる。(4) *fenraj* タイプはエチオピア周辺で見られる。

## 22. Shuichiro NAKAO (ILCAA Joint Researcher, Osaka University)

### “Crop terms in Nilo-Saharan”

ナイル・サハラ語族の諸言語における農作物語彙について、(外来作物である) コメ・コムギはアラビア語やスワヒリ語借用が多いこと、サトイモはごくわずかな言語でしか報告がないこと、ヤマイモは東スーダン諸語を中心に #*badho*、中央スーダン諸語を中心に #*manga* のような形が広くみられることなどを明らかにした。なお、ナイル・サハラ語族の諸言語では、アワ・キビを表す語は報告されていないため、本発表では該当地域で広く栽培されているモロコシ (*sorghum*)・トウジンビエ (*pearl millet*)・シコクビエ (*finger millet*) に関する語彙項目についても分析を行い、かなり多様・複雑な同源語がみつかることを示した。

## 23. Daisuke SHINAGAWA (ILCAA), Junko KOMORI (ILCAA Joint Researcher, Osaka University)

### “Crop terms in Bantu: A general survey on selected crop terms with a special focus on Eastern Bantu languages”

本発表では、バントゥ諸語における穀物に関する語彙について、バントゥ祖語に再建され

る祖形に遡れるものを中心に、それらの地理的分布に関する調査の結果を報告した。ただし、今回の課題として提示された語彙のうち、データベースから安定的に抽出できたものは‘yam’のみであったため、祖形を含め多くのデータが得られる‘sorghum’、‘maize’、‘eleusine’について、これらの通バントゥ諸語的な分布について調査した。一方で、東部バントゥ諸語に限定したデータベースでは、‘maize’に加え‘bulrush millet’のデータも得られたため、これらも調査の対象に加えた。分布の概略は次のとおりである。‘yam’については、祖形に遡りうる形式(\*-kòá)は北西諸語に限定されている一方で、‘sorghum’を指す形式(\*-bèdé, \*-dègì, \*-càkà etc.)については、それ以外の地域に分布するという大まかな相補分布が確認された。‘maize’に関しては、祖形に遡りうる形式は東西対立の分布をなす(\*-pémbá vs. \*-cángó)のに対し、‘eleusine’に関しては広範囲に多様な形式が分布することが確認された。さらに、東部バントゥに焦点を当てると、‘bulrush millet’に関しては\*-bèdéが多く、多くの地域で支配的な分布をなすのに対し、語源的には‘eleusine’を指す\*-dóに遡る形式がビクトリア湖畔地域に集中的に分布している。‘maize’に関しては、東部一帯に分布する\*-pémbáの継承形が広く分布するのみならず、さまざまな semantic shift ないし conversion を起こした形式の存在が広範囲に観察された。